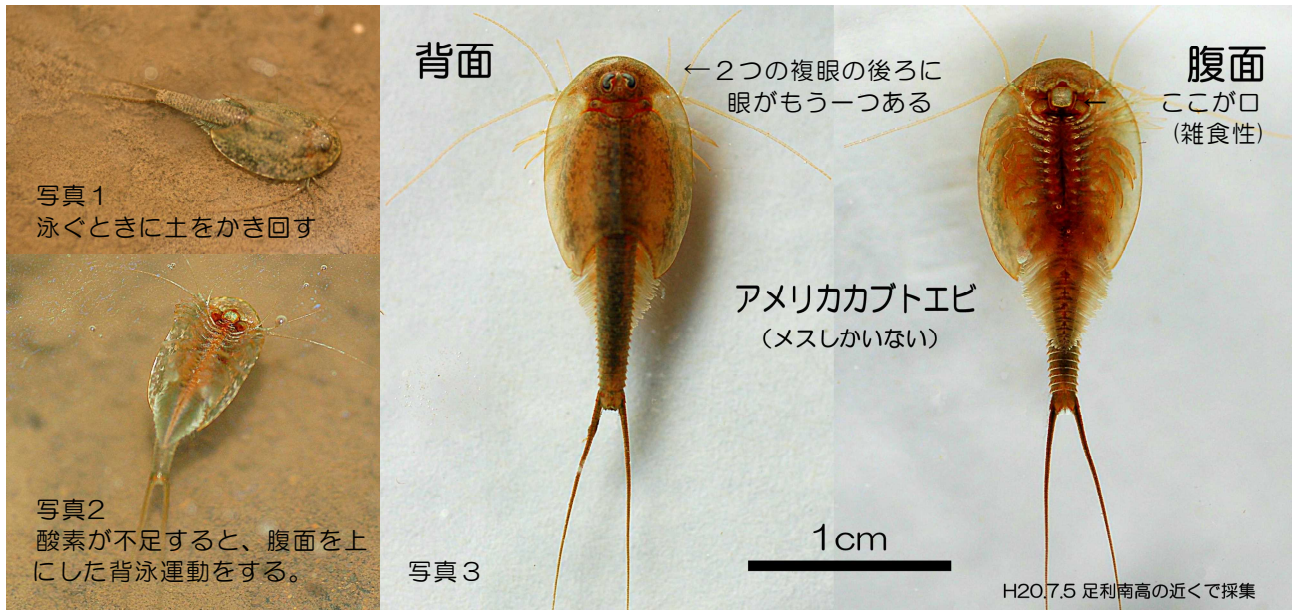


生きた化石・カブトエビ



カブトエビは、栃木県では**県南のごく限られた田んぼ**でしか見ることができない。また、毎年同じ田んぼに必ず出現するというわけではなく、大発生している田んぼの隣には全くいない、ということもある。見たいと思っても、なかなか見つからないのだ。今年は、6月上旬から探し始めて、6月21日に吾妻中学校付近でやっと小さな個体を数匹採集できた。そして、7月5日には足利南高校付近で大群集に遭遇した。網でひとすくいすると、大きく成長した個体が10匹は入っている。これだけの密度だと、水面がカブトエビで波立つように見えるのだ。

よくある間違いで、**天然記念物の「カブトガニ」と混同してしまう**ことがある。確かに、姿形はカブトガニとよく似ているが、カブトエビは最大でも体長4、5センチ程度であり、ホウネンエビやミジンコに近い仲間なのだ。ホウネンエビと同様に、田んぼに水が入ると孵化し、水が無くなるまでに産卵するという、ひと月あまりの短い一生なのだ。



<カブトガニ：体長60cm、寿命は10年以上>

現在のカブトエビ属は、はるか昔の古生代に生息していた**三葉虫から分化**したのではないかと考えられている。つまり、カブトエビはそのころ(約2億年前)からほとんど進化せずに「**生きた化石**」として生存し続け、一部がホウネンエビ、ミジンコなど、別の系統へと進化していったのである。それでは、カブトエビは大昔から日本に生息していたのだろうか。江戸時代の書物には、ホウネンエビについては記載されているが、カブトエビについては、全く記載がない。

それもそのはず、**初めて日本で発見されたのは1916年**なのだ。もともと日本には生息していなかったのだ。どのような経緯で日本に入ってきたのかは不明だが、現在、最も分布を広げているのは「アメリカカブトエビ」である。(他にも2種のカブトエビが帰化している)

カブトエビは、田んぼの水底をかきまわして雑草を根絶やしにすることから、「**草取虫**」として注目され、農薬の害が深刻化する1970年代では、各地で「カブトエビ利用組合」が結成され、実際に水田除草に用いられていた。現在でも、例えば、東京農業大学の昆虫学研究室では、低コスト・省労力で米作りができるカブトエビ農法を広めるべく、**カブトエビ米**作りに取り組んでいるらしい。



吾妻中付近のカブトエビ生息地

ところで、**カブトエビは食用になるのでしょうか。**土地の人が、これを煮て食べてみたところ、キチン質の殻ばかりでドロが多く、思わずはき出したという。そんなにうまい話ばかりではないようだ。